

幽霊能の「旅僧」の性格——遊行、救済する僧を何と呼ぶか——

重田 みち

幽霊能のワキには、旅の途中でその幽霊に縁の深い場所に立ち寄る僧が多く登場する。今回の演目『三山』のワキ良忍もそのような役であって、融通念仏を弘めるため諸国を遍歴するうちに、耳成山の麓で桂子の幽霊に出会う。このように明確な人名が示される曲もあるが、一方で「諸国一見の僧」「都方より出でたる僧」などと名のつて具体的な人名が示されない曲も多い。

このように具体名の示されないワキは、近代以来の謡曲注釈書の各曲冒頭解説には「旅僧」「旅の僧」などと説明されることが多い。大正三、四年刊『謡曲叢書』がすでに多く「旅僧」とし、昭和三年『謡曲三百五十番集』も「旅僧」が多い。同五年『謡曲大観』は、出身が明らかなのは「高野山の僧」(卒都婆小町)、「東国僧」(《田村》)などとやや具体的に示すが、そうでない「諸国一見の僧」等は「旅僧」とする。昭和三十五年の日本古典文学大系『謡曲集』(岩波書店)ではいっそう統一されて、具体名のないものは「旅の僧」とされ、日本古典文学全集『謡曲集』(小学館、昭和四十八年)

や新潮日本古典集成『謡曲集』(昭和五十八—六十三年)でも同様に「旅僧」と統一されている。

以上のように、昭和以前から「旅僧」の類の表現が多用されているが、とくに日本古典文学大系『謡曲集』以降統一化が進んだ発端は、同書校注者の横道萬里雄氏が能の舞台上での演出に重点を置かれ、それらの僧の出立がいずれも同様の着流し僧として伝えられてきた——少なくとも出立の類型化が進んだ近世以降は——ことから、それらを同類として整理されたことであつたと思われる。これは観世流大成版謡本等、実際の演出が重要な意味を持つ各流謡本と同様の解説が、謡曲注釈書にも行われるようになったということである。以後の注釈書が各役の説明に出立を明記するようになったのも、その統一化と連動しているよう。

このように、謡曲を文学として読むばかりでなく舞台上での演出が把握できるようになったことは、謡曲注釈書の役割の拡がりであると言える。ただし一方、「旅(の)僧」という

ことばでは、そのような僧の法統や何のため旅をするのかといった、ワキ僧の性格にかかわる重要な点が表現しきれず、捨象されてしまうことも確かである。かつて徳江元正氏は、能における「諸国一見の僧」の役の「本来のすがた」とは何であつたか、その造型の背景に注目された(これは諸国一見の僧にて候——ワキ僧の出自——、『能楽タイムズ』三九八)が、能を立体的にとらえるには、そのような視点を外すことはできない。徳江氏稿では、延慶本『平家物語』に、六代御前が山伏姿に身をやつし、亡父を供養し平家一門の精霊菩提を弔うために「諸国一見せむ」と思い「山々寺々修行」する話が見えることや、能《龍田》に、諸国の霊仏霊社に納経する聖がワキとして登場すること、『太平記』『曾我物語』等の軍記物に有縁無縁の亡骸を手あつく葬る布教者としての聖がかかわっていたらうことなどが挙げられており、一所に長く留まらない「ワキ僧の出自」の一つを示されたものとして興味深い。

このように、世阿弥活動期をはじめ室町中期頃までに作られた幽霊能におけるそのようなワキ僧の造型には、当時の社会や文藝の背景がうかがわれるが、それらのワキ僧の法統や旅の目的はすべて同じであるわけではなく、能の制作史に留意する場合にはとくに、それらの違いへの着目が必要となる。いま、それらを以下おおよそいくつかに分けて見て

おきたい。

まず、具体名が曲中に示されたものは二種に分けられる。一つは、『三山』の良忍や『誓願寺』の一遍のように、念仏を国土に弘めるために諸国を巡る半超人的な融通念仏や時衆の上人(聖)である。これらは世阿弥よりもや後代の作と見られ、世阿弥作の『実盛』の他阿弥上人は、諸国を巡る設定ではないがそれに類する。

別の一つは、シテの幽霊の縁者である。『敦盛』の蓮生法師や『忠度』の俊成の家臣がそれに当たり、いずれも世阿弥作の修羅能である点に注意される。『敦盛』は「十念授けおはしませ」「若我成仏十方世界、念仏衆生、摂取不捨」などとあることから、浄土系の僧であることが明らかである。『忠度』は『敦盛』に較べると宗教色が薄れているが、「花の臺に座し給へ」という極楽の蓮華を指すことばから、やはり浄土系の僧と見てよからう。これらの僧には、徳江氏の述べられた有縁無縁の亡骸を葬る布教者や、村井康彦氏が注目された、武士同道し戦死者の遺族とのやりとりなどを担う、南北朝期頃から現れた時衆の従軍僧(『平家』断想)、『文芸の創成と展開』所収、等)の影響が、従軍僧そのものではないけれども感じられる。先の『三山』『誓願寺』のワキのように半超人的な存在とは異なるが、やはりシテの幽霊を救済する役割を負っていると云ってよい。

次に、具体名が示されない僧のうち「諸国

一見の僧」や「都方より出でたる僧」は多くの曲に見られるが、天野文雄氏はこの本文異同について、「諸国一見の僧」とする謡本の伝本は上懸り系に、「都方より出でたる僧」は下懸り系に多いこと、また近世以前の謡本では「諸国一見の僧」とする本が今日ほど多くなく、次第に「諸国一見の僧」へと類型化されていったことを指摘された(「諸国一見の僧」がたどった道」、大槻能楽堂『おもて』一一一)。

天野氏によれば、「諸国一見の僧」を原形とする可能性が高い幽霊能で早いものに世阿弥改作『松風』や世阿弥作『鶴』があり、徳江氏・天野氏ともに注目していられるように、南北朝期の『諸国一見聖物語』などがこの役造型にかかわった可能性がある。このように具体名が示されないワキ僧が登場する世阿弥作の曲には、『井筒』『八島』など甲いの場面がなく法統も不明瞭なものが目立ち、また甲いの言葉があっても、『鶴』の「一仏成道観見法界、草木国土悉皆成仏」のように天台系とされるものや、観阿弥原作、世阿弥改作とされる『求塚』の「南無幽霊成等正覚、出離生死頓生菩提」のように、念仏とは異なるものが見られる。したがって、世阿弥の関与した作品に限っても浄土系の僧とそうでない僧とがあり、その法統も一つではないが、世阿弥の修羅能に浄土系が目立つのは、やはり従軍僧との関連を思わせる点として注意したい。

またこれらとは異なるものに、禅僧のワキ

と見られる『松浦』がある。天野文雄氏が受衣や「善哉解脱服、無相福田衣、被奉如戒行、広度諸衆生」の句と禅との関係を指摘していられる(『松浦佐用姫』を読む―その「趣向」を中心に―、『観世』七八―一二)。この曲の場合、世阿弥自筆台本の名ノリに「行脚の僧」とあることが、すでに禅僧であることを意味しているよう。「アングヤ」は、禅僧との交流によって中世に入って新しく日本にもたらされた唐宋音による訓みだからである。

このように、旅をするワキ僧といっても、法統の面からのみ見てもいくつかに分かれたため、「旅僧」では表現しきれないその性格を表す総称を探すのは容易ではない。ただし、それらのうち古い曲のワキは宗教色が濃く、シテの幽霊を成仏・往生させる役割を担っていたものと推測され、それは人を救済する役割に通ずることから、広く見れば、古くは行基から空也・良忍・重源・一遍など、さまざま法統における遊行僧としての性格を有していたことは確かであろう。したがってこれらのワキ僧を総称して、たとえば「遊行僧」などと呼んでみてはどうかなどと考える。「遊行」は「遊行派」「遊行寺」等、時衆(時宗)に關してしばしば用いられるが、元来はもちろん時衆に限ったことばではない。ただし、これは難しい問題であるから、少なくともしばらくは悩むことになりそうである。

(早稲田大学演劇博物館招聘研究員)